国宝版

島木健作全集

第九巻

島木健作全集

第九巻

国書刊行会版

島木健作全集　第九巻

昭和51年12月10日　印刷
昭和51年12月15日　発行

定価3800円

著作権者との
申合せにより
検印省略

著　者　島木健作
著作権者　朝倉　京
発行者　佐藤今朝夫
制作・尾沼　汎

〒170 東京都豊島区巣鴨3—5—18
発行所 株式会社 国書刊行会
電話 (917)8287(代表) 振替・東京—5—65209

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

第九巻　目次

或る作家の手記……三
運命の人……一八三
解題……五二

監修
稲垣達郎
小林秀雄
中村光夫

編集
大久保典夫
小笠原克
高橋春雄

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

或る作家の手記

「太田さん、あなた〇〇公社の石山君、御存知ださうですね？」と、太田がハルピンで知り合つた協和會の本山が、人のよささうな笑顔を向けて話しかけて來た。小説家太田の滿洲旅行も二た月餘りになり、あちらこちらの田舍をあるいて再びハルピンに歸つて來て、明日またちがつた地方へ出かけようといふ、その前の日の晩だつた。本山が太田を招んで、彼の旅行談を聞きながら、一緒に飯を食つてゐたときだつた。

「ええ、知つてゐます。面識があるといふ程度ですが……。」

「あの人がね、あなたの開拓地視察の感想といふものを問題にしてゐましたよ。」

「ほう。しかし私、石山さんには逢つてゐませんよ。こつちへ出張して來てゐるといふことを、どこかでちらと聞きましたけれど……。あなた、逢つたんですか。」

「ええ、逢ひました。三井君ね、知つてるでせう？　あの人にあんたが、開拓地のことを話した、それを聞いたとかいふことで……。」

「ああ、さうですか、三井には私、話しましたから。それでどういふんです？　石山さんは。」

三井は、太田の古い友達だつた。彼が滿洲に行つたといふことはかねてから聞いて知つてゐた。しかしどこで何をしてゐるものかわからなかつた。あちこちでたづねて、是非逢はねばならぬといふ友達でもなかつた。それが、ある日太田が、滿洲でも二流どころの、このごろ非常な勢で發展しつつある都會に下りたとき、

その晩、宿へ、ある新聞のその町の支局員の肩書ある名刺を通して、ひよつこり現れたのが三井なのだつた。

「石山君はね、やはりひどく不滿らしかつたですよ。太田君のはね、やつぱり一面的にしかものを見てゐないとか、囚はれた先入見に災されてゐるとか、いろいろ言つてゐましたが……。どつちが囚はれてゐるか、をかしくなるやうなことですがね。何しろ自分の會社の仕事なんだから……。太田君には、我々としてもある期待を持つてゐたんだが、やつぱり彼も、とかなんとか言つてゐましたよ。」

太田は、石山などといふ人を、その人物をもその意見をも、別に尊重してゐるわけでも重要視してゐるわけでもなかつた。しかしやはり彼は面白くなかつた。彼はこの問題については、自分の意見を吐くといふことについても、人の意見を聞くといふことについても、ずゐぶんと神經質になつてゐるのだつた。滿洲の土地をはじめて踏んで、この國の多くの人々の、日本からの見學者の群、——とくに文學者に對する對し方、その接觸から生ずる雰圍氣を、見、聞き、感ずるとき、彼のやうなものは神經質にならざるを得ないのだつた。それは心からの歡迎のやうでもあり、自分たちの仕事、といふよりは心組みの示威のやうでもあり、一本釘を打ち込んでおくためのやうでもあり、歡迎せられざる客への否味のやうでもあり、ただの事務のやうでもあり、ただ利用しようがためのやうでもあり、眞實の協力の石据ゑを立てんがためのやうでもあり、おそろしくさまざまな當りで當つて來て、彼のやうに世慣れぬものは、困惑しないわけにはいかないのだつた。おそらくはそのすべてが眞實なのであらう。さうしてそのやうに相矛盾し合つたものが、——高邁なものと卑少なものとが、錯綜し合つてどぎつくぶつかつてくるといふことのなかにこそ、この國の現實を、——新しく生れ、育ちの苦しみをなめつつあるこの國のいぶきを感じることができるのだつた。太田は困惑しつつも、すべての複雜な生きものに共通なものを感じ、それを感ずることはそのものへの愛情に通じることを思

ふのだつた。しかし、さう思ひながらもそのある時ある時においてはやりきれなくなることが多かつた。絶えず何かに監視されてゐる感じ、この感じがわけていつもつきまとつた。滿洲は大陸的でのんびりしてゐるどころではなかなかないのだつた。「頼むからそつとしておいてくれないか！　滿洲の旅だからつて何もさう特別な旅でばかりなければならぬ理由はないだらう。氣樂にのんびりと旅をしてならぬといふことはないだらう。おれは何も特別なものなんかぢやないんだから、さう一擧一動に眼をつけることはやめてくれないか！」――彼としても、時としてさういひたくなることがあるのだつた。文學者の旅行者などが、どこで酒を飲んでどうしたとか、どこでダンスを踊つたとか、どこで女とどうしたとか、といふやうなことが、じつにいつまでも話のたねにされ、そしてその話され方が、日本でのやうに單なるゴシツプとしてではなく、その人間の全價値がそこからきめられかねないのを見聞きしたりすると、さういひたくなるのだつた。「ちつとも大陸的でなんかないぢやないか！　いや、これが大陸的といふことかも知れないな。」と、彼は思つた。彼としては、それらのゴシツプ種のどの一つにも關係のありやうがないやうな小說家ではあつたのだが。

しかし彼がそのやうに人に眼をつけられてゐる感じを持たねばならぬといふのも、一つには自業自得なのだつた。彼は彼のわるい癖から、滿洲旅行といふことについても、幾らか大げさな身振りを人に感ぜしむるやうなことにいつしかなつてしまつてゐたのである。何か他の旅行者とはちがつた大きな氣組みにおいて行はれる旅ででもあるかのやうな印象を人に與へてしまつてゐたのである。一體に彼は人からは、糞まじめな、取つつきわるい人間のやうに思ひとられてゐたが、その實は口輕な、ひどく話好きな、輕はずみでさへもあるやうな人間だつた。調子に乘つてしやべり出すと止まるところを知らなかつた。現在可能な實行と將來への希望と到底實現され得ないことが分つてゐるやうな空想とがごつちやになつて一度にどつと吐き出される

のだつた。當然そこには誇張と、自分で思つてもゐないことをさも思つてでもゐさうにいふことと、大言壯語とがつけ加はつた。その大言壯語の口調には、昔、社會運動の實際に攜つたことのある彼の名殘りがなくもなかつた。さういふことのあとには、彼は恥で赤くなり、自己嫌惡に陷り、人に逢ふことをもいやがつた。が、やがてすぐにまた彼はさういふことを繰り返した。「つまりはオツチョコチョイなんだ！」——知らず知らずのうちに嘘に落ち込まねばならぬやうな自分を、彼は、文章などを書く人間として致命的だと思つた。人間の根本において篤實といふものを缺いてゐるのだと思つた。彼は何ものを知らぬ妻の前に恥ぢ、老いた母の前にも恥ぢた。「たしかに親父といふものが原因なんだ。」とも彼は思つた。早くに死んで話にだけしか聞くことのできない父に、彼の母が自分の亭主として遂に尊敬することのできなかつた父に流れてゐた血のことを考へた。彼のさうしたところは、彼の書く文章にも當然あらはれた。——しかし彼は絶望はしなかつた、誰に助けてもらふわけにもいかぬことだけに、自分にさういふ反省があるといふことを手掛りとし、人間の正直とか誠實とかいふことが、少しづつでも分つていくやうな氣がすることをたよりとしてゐた。

その時も事のはじめは新聞記者だつた。新聞記者といふことを拔きにして友達であるその男を前に、相手の記者といふ職掌を忘れて、彼は得意になつてまくし立ててゐた。「少くとも半年ぐらゐは行つて來たいもんだね。今のおれの狀態ぢやそれもむづかしいが。通りすがりの旅ぢや、わかるわけもないぢやないか！欲をいへば一年だね。四季のめぐりが一通り分るんでなくつちやね。といつてもおれは何も向うをタネに小說を書かうつて氣はないがね。今までの向うに行つて來た文士の旅行記つていふもの、あれらは一體なんだい？　文士らしく印象は記してゐるが、問題の根本は一體どこにあるかつてこと、どれを見てもわからんぢやないか！　……うん、おれにはね、友達がゐるんだ。中學の時の同級でね、移民地で醫者をしてるんだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

じつにいい奴でね。ヌーボーとしてゐて滿洲にはお誂へ向きなんだ。そこにいつまでをつてもいいつて言つてくれるんだがね。……芋の皮ぐらゐは剝けるだらうから、そんな手傳ひをしながら、しばらくをつたら面白いだらうがなあ。」

話してゐるうちに樂しくなつて、勝手なことを次から次へとしやべつた。二三日後に彼は新聞を見た。彼のことが寫眞入りで報道されてゐた。作家太田耕吉は、半年以上滯在の豫定で渡滿する。開拓地に滯在して農民と辛苦を共にする。あるひは向うに移り住むことになるかも知れない、云々。太田そのものの存在は小さいが、國策開拓民のことにいくらかでも結びつけうれば、新聞記事にはなるのだつた。この報道は滿洲の人々の注意をも喚起した。

しかしそんなことを言ひ、そんな風に報道されてゐる太田自身の心の內實はもつと沈んだ寂しいものだつた。內の寂しさが彼をはしやがせ、饒舌にさせてゐるのかも知れなかつた。彼は彼の滿洲行を古風に言へば、巡禮のやうな氣持において考へてゐた。又童話的にいへば青い鳥を探しての旅のやうに考へてゐた。彼は作家としても人間としても行き詰つてどうにもならぬところへ來てゐるとは考へてはゐなかつた。行き詰るなどといふのはむしろ稀な强い資質の人間にのみあることで、彼などにはいつもどこかに逃げ道があり、望んでもそのやうな土壇場に立ち得る人間では遂にないのかも知れない。しかしともかく彼の實際は、彼らしく生きる希望にもえてをり、文學の上でしたい仕事は山ほどあり、そしてそれは何れも手の屆くところにあるやうな氣がするのだつた。彼は曾つて自分を、才能ある作家だなどと思つたことは一度だつてなかつた。しかしながら彼はまた文壇といふ所を眺めまはして、自分も作家として何かお代りのきかぬものを持つてゐさうな氣がしてならなかつた。お代りのない作家といふものは多いだらう。一人前の作家と名のつくものはみ

んなさうだらう。しかし彼は、彼に屬する何がお代りがきかぬかといふことについてぼんやりながら考へ、そのものを自ら大切に思つてゐたのである。彼は又自分が作家として必要な勉强や修業にも缺けてゐることをよく知つてゐた。それは彼をしよげさせもしたが、また勇氣づけることもした。彼は時々文壇を眺めまはし、傲慢な氣持になつて自分にいふことがあつた。「彼等は作家になつて飯を食ひ出してからもう十年二十年なんだ。そしてそれ以前にも、文學々々といつてゐた年月が長くつづいてるんだ。それは尊敬すべきことだらうさ。しかしさう長くやつてゐてあの程度だつてこともこれも亦事實なんだ。そりや、おれは小說は下手さ。いはなくつたつて分つてるよ。おれは小說つてものを書きだしてまだ五年だ。小說家になつてからも餘り小說勉强はしてないんだ。讀む本だつて小說よりはほかの本の方が多いんだ。昔からの習慣でね、これや仕方がないんだ。だからこんなざまなんだが、しかし、これからおれは勉强するよ。死身になつてやつてみるよ。容易でないものだことがだんだん骨身にしみて來たからね。するとどうやら、彼等よりおれの方が、先があるつてことになりやしないか?」

彼は書かうと思つてゐる長篇小說のことを思ひうかべた。それは卽座に十ほども思ひうかんだ。彼はそれらの小說の假題とその骨子のやうなものを誌した小さな手帖を持つてゐた。彼の癖として、彼自身の生活にもとづくある一つの觀念が頭腦のどこかに巢喰ひ、それが日と共に段々しつこく彼をとらへ、內において先づ小さな流れとなり、段々あつちこつちからの流れをあつめて大きくなつていくと、彼においては、小說はもう確實に書けさうな氣持がして來るのだつた。ある情景とか、ある人物とかが動き出してくるのはそれからあとのことだつた。「おれはこれだけ書くまで生きるかな?」——その手帖をひろげて、心をほのぼのとさせたあとには、きつとそんなふうに思つた。彼は今も時々血痰を吐く男だつた。內臟がひどく下垂して攝

つた榮養が吸收されぬやうな男だつた。「しかしおれのやうな體質は、動脈硬化にはならぬといふからだいじをとれば長生きするかも知れないな。」とそんなことも考へた。さう思つてみると、實際に周圍の老人共のなかには、似たやうな體質のものが多かつた。しかし實際は、彼はそんなことをただ思つてみるだけなのである。彼は頭だけでは、長生きといふことにそんなに執着はしなかつた。自分に平和な安穩な老年が來るなどといふことは考へただけでをかしかつた。立派な老人の世界といふものは、彼も亦尊敬したし非常な魅力も感じた。老いるに從つて智慧の輝きを增し益々若やいで來る。抑壓と困苦のなかにあつて傲然と空うそぶいてゐるやうな西洋の老人共のことを思ひうかべた。しかしそんな老人の世界は彼には手の屆かぬところにしか思へなかつた。さうして彼は、どんどん子供をつくつて、自信ありげに樂しさうなまはりの人達を見て、少しばかり羨ましいやうな馬鹿らしいやうな感じを持つた。

これらすべては書けなくても、北海道開拓物語だけは是非書かねばならぬ、と彼は考へてゐた。彼は數年前からそれを考へて、北海道開拓に關する書籍類は、古いものも新しいものも、手許にかなり豐富に集りつつあつた。それらには馬鹿高いものがあつて、彼は買はなかつたが、開拓使の火消道具をたつた一枚の色刷繪にして、紙に張りつけて、何圓といふやうなものもあるのだつた。それへの支拂ひは時々彼の生活費をさへも突破した。彼は屢その尨大な小說の筋立てや、それの進行や、それの出來上りやについて空想した。それは時には「夜明け前」のやうなものでもあり、時には「戰爭と平和」のやうなものでもあつた。それを思ふことは彼にとつての安息所だつた。それも亦現代とのつながりなしには彼には書けないが、形の上では一種の歷史小說だつた。現代の思考にくたびれ、どうにもならぬやうに思ふとき、彼はしばしばその世界へ逃げていつた。「現代が書けなきや、現代は書かないさ！　おれはひとり山へ閉ぢこもつて十年かかつてこ

いつを書くんだ。」さう思ふことは大きな慰めだつた。それだけにそれはまた、是非書かねばならぬといひながら、彼の最後の仕事であるかも知れないのだつた。それにしても書物は今後もどんどん集つて來るだらうが、生きてゐて物語つてくれる彼の老母はもはや今年七十である。夕飯のあとなど、彼が母の記憶を刺戟しようとすることはだんだんに多くなつていくのだつた。

「おつ母さん、その二人のお雇外人教師の名前といふのはおぼえてゐませんか?」

「おぼえてますよ。ドンにボーマンていふんです。」

「ドンにボーマン? ちよつと變な名だなあ。アメリカ人だらうに……。」

「どこの國か知らないけどね。ドンは農學校の先生、ボーマンは、農場の方のことをやつてゐたものです。わたし達が毎朝、牛乳の瓶を下げてね、農場に乳をもらひに行くと、ボーマンが可愛いといつて頭を撫でにくるんです。青い眼をぎよろぎよろさせて來るもんだから、みんなおつかながつて逃げた、逃げた。……それでお菓子なんぞくれるやうになつたもんだから、だんだん逃げなくなつたんです。お菓子は、金米糖、此頃はあんまり見かけないんぢやないかねえ。その頃は大して珍らしいものでした。」

「そのうちはじめて汽車が通つてね。それに辨慶に義經といふ名がついた。今日は辨慶が走る、今日は義經が走るつて、みんな走つて見に行つたもんだよ。」

その後、彼が新しい北海道史を買つて來てひらいて見てゐると、寫眞版があつて、そこにはドンもボーマンもゐるし、辨慶も義經もゐるのだつた。彼はその厚い本をひらいたまま、抱くやうにして持つて階下へ走り下りていつて、「おつ母さんおつ母さん、ゐましたよ、ドンとボーマンが。」といつて、母親に見せずにはゐられなかつた。「おい、來てごらん、……この毛唐がね、子供のおつ母さんの頭を、毛むくぢやらな手

で撫でたんだよ。」と、彼の妻をも呼んで、三人で、その寫眞に見入らずにはゐられなかつた。

書くこと、書きたいと思ふことは多かつたが、しかし、そのやうに廣い世界が彼の前に繰り廣げられてゐても、――いや、繰りひろげられればひろげられるほど、彼は自分の內部に、最も根本的なものの空虛を感ぜずにはゐられぬのだつた。ある觀念の流れのやうなものをつかまへれば、それだけでも小說が書けさうな氣がするといふ彼も、實際にはそれだけではだめなのだつた。缺けてゐるのは彼の精神の發條のごときものである。結局はそれは思想なのであらうが、しかしそれは論理的に把握された、體系立つた知識としての思想ではない。それはより深く人間の奧底に根ざした、思想以前のあるひは思想以後の、愛とでもいふよりほか仕方がないものである。それなくしては、何を書かうが何をいはうが、生きた人間の息吹きを傳へることができぬものである。彼は自分にそのやうな愛の泉が涸れたなどとは思ふことはできない。以前に彼は一つの思想を信じ、彼の人間的感動のすべてをその思想の形式を通すことになれてゐたために、感動の發して動くすがたそのものが一つの型を持つてしまつてゐたといふことができる。それがその思想を棄て去らねばならなくなつたので、型に慣らされてゐた彼の精神は途方に暮れてしまつたのではないか。それは却つて自由に潑剌として動き出さねばならぬのにも拘らず、何か臆病に、いぢけて、流れるやうな、沸き立つやうな動きから遠くなつていつたのである。彼はこの自分の心臟に活を入れることを思つた。さきの型に代る新しい型が必要であらうか？　それは必要ではないだらう。彼はそのために先づ、自分の身を起して、出來るだけ遠くまで行かうと思つた。さまざまな人間の生活の中へ、――中へでなく、その表面だけにしかふれることができなくても、そこへ行かうと思つた。さまざまな人間の生活は、彼が坐つてゐる周圍にもあつた。しかし身を起して遠くへ行くといふことがこの際必要だつた。何かしら遠くから呼びかけてゐるものがあるやう

に感じられた。心はそこで清々しく洗はれるやうに感じられた。それに根が田舍ものである彼は、地方生活のなかに入つてゆく時に、安心して寛ぐことができるのであつた。生活といふものが、端的につかめたやうな氣がして、眼が開けることもあつた。何かしら素朴な、眞率な、激烈でさへあるものに心をゆすぶられることで立ち直りたいと思つた。

そのやうにして彼はその前の年の夏、彼としては一つの試みである長篇小說を書き終へると、當分書くことを自分からやめることにして、東北から北海道への旅に出て行つた。暑いさかりを生れてはじめてリュクサックを肩にして二月ほど過した。そして今度の滿洲旅行はその時の旅の延長だつた。

彼はチフスの豫防注射を無理してやつたためにひどく發熱し、まだ治り切らぬからだを心配しながら、長旅の汽車にゆられていつた。ある雜誌社の名を肩に刷り込んだ名刺を懷にして全くの一人旅だつた。彼は彼の出發がひどくおくれてしまつた原因である、胃癌の疑ひのある黑い苦汁を吐いた老母のその後のことなどを思ひながら、初めて見る滿洲の風物にも心がたのしまなかつた。この茫漠とした、渾沌としてもゐるやうな新しい國にどの角度から觸れていつたらいいものか？　彼はそれを先づ集團開拓民の生活からとしてゐたけれど、その開拓民の生活にしても、どれほどつかめるものか、どれほどその眞實に觸れうるものか、自信がなかつた。開拓地を見るといふことは先に言つたやうな氣持の彼にとつて一つの道であつたが、またそれ自身が獨立した一目的でもあつた。彼は「太田さん、あんた是非ひとつ、ほんたうのところを見て來て、我我に知らせて下さい。どうも何を讀んでも聞いても分らぬ所が多く、また分つた所も信用していいかどうか分らずにゐるんです。」と熱心に語つた百姓の青年達の附託に對して答へなければならなかつた。それにまた彼は、農民問題が少しでもわかるやうになることによつて、民衆の生活を考へるといふことから離れまい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com